

宮城県薬剤師会の緊急支援車両モバイルファーマシーを見学しました(2012/11/17)

場所：宮城県薬剤師会（宮城県仙台市）
テーマ：大災害時の薬剤支援車両に必要な機能

11月17日（土）17:00－18:00 仙塩利府病院の加藤薬剤師からのご紹介により、宮城県薬剤師会館を訪問し、宮城県薬剤師会が独自に購入した緊急支援車両モバイルファーマシーを見学しました。東日本大震災時に薬局も甚大な被害を受け、緊急時に必要な薬剤だけではなく、慢性疾患などで日常的に使用している薬剤も大幅な不足をきたしました。全国からたくさんの薬剤支援がありましたが、薬剤師の不足と、それまで投与されていた薬品情報の喪失、調剤する場所や道具の不足が大きな問題となりました。宮城県薬剤師会は、各方面に働きかけるとともに、緊急時に調剤が可能となるような支援車両（図1）を独自資金にて調達されたのです。

この車両には多くの独自の工夫がなされています。既存の救急車などの緊急支援車両を購入するとすると3000万円を超す予算が必要になるため、キャンピングカーのノウハウに詳しい理事が山形の企業に依頼してキャンピングカーをカスタマイズして薬剤師のニーズにピタリとあてはまる車両を作成した結果、予算を大幅に縮小することができたそうです。

まず、車内を調剤に特化し、処方箋をもってきた患者・家族に対応可能なテントを車両側面につけています。悪天候でも3方向に縦幕を張ることができ、さらに側面には衛星放送の受診可能なテレビモニターが備えつけられています。このスペースは簡易診療所にもなります。車両はディーゼルエンジンですが、ガソリンで稼働する自家発電機を備えていて自立して電力を使用することができます。乗員定員は3名で普通免許で運転でき、2人が横に眠れるロフトとシャワーが浴びられるトイレ、家庭用エアコンや天井換気扇がついており、さまざまな気象条件での居住性能にも優れています。調剤室として機能する内装は、100種類以上の薬品棚、自動分包機、精密秤、流し、冷蔵庫など幅広い調剤ニーズに対応可能で、悪路運転時の落下転倒防止がなされています。また、宮城医療情報ネットワークMMWINとも情報連携し、患者さんの医療情報・過去処方内容をサーバーから得られるようにしています。トランシーバーで、現場での情報伝達が可能です。先進的につぎの災害に備えている薬剤師会の例は多くの参考になると思います。



側面テント展開時



左薬剤棚、奥シャワールーム、右分包機

文責：江川新一（災害医学研究部門）、写真：山田卓郎（宮城県薬剤師会）